寄稿1　学生に身につけてほしい力

国際的に通用する教養と語学力こそ これからの学生が学ぶべきこと

人間力の基礎であるリベラルアーツを学ぶことが大学生の使命。
国際的に通用する語学力を身につけ、グローバル時代に必須の教養を。

国際教養大学 理事長・学長
中嶋　嶺雄

多面的で基礎的な教養を身につける

私どもの大学では、これからの時代に一番必要な力として「国際教養」というコンセプトを掲げています。

18歳から19歳くらいの高校生が入学して一番身につけなければならないことは、深い教養と幅広い知識です。国際教養の根本はリベラルアーツで、人文・社会科学の基礎を学士課程のうちにきちんと学ばなければなりません。

リベラルアーツという言葉は、しばしばアーツ・アンド・サイエンシズとも呼ばれます。つまり、教養分野や人文・社会科学と同時に、サイエンスも入ります。文系、理系を問わず、そうした基礎を学ぶことが非常に大切です。

国際教養大学は文系の大学ですが、数学も代数学や統計学をきちんと学べますし、化学、物理、生物は実験まで組み込んだ授業をしています。同時に、音楽や美術史にも力をいれています。渡辺玲子さんのように世界的なバイオリニストが実際にクラスを持っていますし、美術史の場合はミケランジェロの専門家の田中英道さんがずっと講義を続けています。文系、理系、そして芸術分野。これがまさにリベラルアーツだと思います。

しかし、これからのグローバル化の時代は、もう一つの要件が必要なのではないでしょうか。それはまさに、グローバルな時代に必要なコミュニケーション能力であり、日本が一番弱い発信力、発言力です。

CNNにも時々出ているニューズウィークのザカリヤさんは、日本と中国の外交官を比べると、全く勝負にならないほど中国の外交官の方が優れている、といいます。中国の外交官は、国際組織とは何かという知識、会議前の準備、ストラテジー、タクティクス、そうしたことに非常に長けている。一方、日本の外交官は常に上司ばかり見ていて、まったく自発性がない、というのがその理由です。そのうえ、彼らは英語ができない。英語を十分にしゃべれないために日本の存在感が小さくなっていると言っています。

外国語を身につけ
自分の中に別なる宇宙を創る

国際教養大学は、国際的な貢献と、地域に貢献する人材育成という二つの大きなミッションを持っています。特に国際的に活躍する人材育成のためには、外国語の運用能力が決定的に重要だと考えています。

TOEFLのPBTで600点以上取らないと、英語が出来るとはいえません。600点以上を取って初めて、英語で仕事もできる。しかし現状では、600点以上を取っている割合は、日本の全大学生の0・2%前後に過ぎません。

大学時代に一番身につけてほしいのは外国語でのコミュニケーション能力です。これがまさ

他人を尊敬・尊重すること

二つ目は「パブリック・インテレスト」です。自分が良ければ、という「セルフ・インテレスト」だけでなく、公共に対する思い、つまり「パブリック・インテレスト」をしっかり育んでほしいと思っています。他人への愛とか、ナチュラルな愛情、リスペクト・フォー・アザーズ、他人を尊敬・尊重することを二つ目にあげたいと思います。

社会人になって数年は、自分のスキルアップやキャリアアップ、あるいは所属する組織や会社のために頑張らざるをえないシーンが多々あります。しかし、それだけで幸せになれるものではないと思います。社会のためにという思い、あるいは、他人を尊敬できる人間性をしっかり育んでほしいと思います。

自分自身のレベルアップは大切です。でも、それだけでは偉くもなれないし、幸せにもなれない。他人のために、社会のために、世界のために、という気持ちがそこにあってこそ、本当に良い形で人材として育っていくと思っています。

いま多くの若者は、ビジネス書などの影響を受けて、とにかく自分のスキルアップ、キャリアアップ、ということに走りがちですが、本当に大事なことはこの社会に対するパブリック・インテレストや他人に対する愛情だと思います。しっかり学んでほしいと思います。

杉村 太郎（すぎむら たろう）
慶應義塾大学理工学部卒業。ハーバード大学ケネディ行政大学院卒業。1987年、住友商事入社。1992年、就職・転職支援のキャリアデザインスクール我究館／㈱ジャパンビジネスラボを設立。2008年より、ハーバード大学客員研究員、現在に至る。我究館は毎年難関業界や超人気企業への内定者を数多く輩出しており、著書『絶対内定』は就職活動のバイブルとなっている。

「限界を超え頑張れる自分」を信じること

次に、「セルフ・エスティーム」です。自分を信じること。

社会人になってからも、つらい局面はたくさんあります。どんな人にも、辛さを乗り越えなければならないシーンがあります。そんな局面を乗り越えるために、自分を信じて頑張っていける、という気持ちを学生時代に育んでほしいと思います。どうすればそういう力がつくか。大きく分けると二つあると思います。

一つは、短い期間でもいいから、限界を超えて頑張るということを学生時代に一回は経験してほしい。対象は恋でも、スポーツでも、勉強でもいいと思います。楽をして成功するのではなく、「自分はやったんだ！」と思える成功体験を味わってほしい。

二つめは、絆です。本当に自分に自信を持てるのは絆だと思います。自分と同じように、あるいは自分よりも大切に思えるような恋だとか友情だとかを経験し、そういう存在がいると思ったときに、人は何倍にも強くなれます。だから本当にお互いを思い合える絆を経験してほしい。若い時の恋は破れ去るものであるかもしれない、過去になるものであるかもしれない、でもあのときあの絆は絶対に本物だった、と思えることを経験してほしい。

自分に合ったリーダーシップを知る

どんな組織のどんな役職でも、新入社員であっても、互いがチームのために力を出し合うというリーダーシップが求められると私は思っています。そうしたことは、自分のためだけに勉強してAを取った、ということからは学ぶことができません。

いま企業でも、個人の成果主義から、チームの成果主義に移行しています。会社のピンチを救うのはリーダーの役目ですが、それが全員に求められているのです。時には新入社員の女性が立ち上がって「もっとみんなでコミュニケーションを図りましょうよ」、という言葉で救われたりもします。一生懸命に頑張る姿で周りのモラルやコミットを高めることができる、あるいは、円滑なコミュニケーションの雰囲気を作ることができる、みんなの前に立って励ます。リーダーシップにはいろいろな形があります。そして、全ての人にこれが求められると私は思っています。そういったものを、チームというものの素晴らしさを学生時代に知ってほしいと思っています。

に、国際教養です。従来型の教養に加えて、グローバル化時代に備えた国際的なコミュニケーション能力。そこでの国際語としての使用言語は英語と決まっています。論争の余地はありません。日本から外に出れば全て英語の世界です。

昨年末に福岡で日本、中国、韓国の首脳会議がありました。たがいに飛行機で2時間ほどの位置にあり、欧米人から見れば人種の違いも分からないほど近い関係です。それなのに、通訳をつけないとコミュニケーションができない。これを英語でやれば、通訳なしでコミュニケーションできるわけです。いかに英語が普遍語か、グローバル・ランゲージか、ということです。

そういう時代に対応するためにも英語をきちんと学んでほしい。英語を学んでおくと、単に国際的に活躍できるだけではなく、インターネットから世界の情報を入手したり発信したりすることもできますから。

しかし、英語だけやっていればいいというわけではありません。英語以外にもう一つ外国語を学ぶべき、というのが私の主張です。母語である日本語と、普遍語としての英語に加えて、さらにもう一つ言語を学ぶと、お互いの言語空間が刺激しあって、ボキャブラリーも増え、最終的には母語が非常に磨かれることになります。これはプルリリンガリズム(Plurilinguralism)という考え方で、EUでは言語教育の先端的なあり方になりつつあります。

私の場合は高校時代にフランス語を学び、大学では中国語を専攻し、仕事上英語を使わないわけにはゆかない、ということでやってきました。外国語を学ぶことは、心の中にその言語の世界を作ることです。言葉ができると、自分の心の中にもう一つの宇宙が出来ます。

中嶋　嶺雄（なかじま　みねお）

1936年長野県松本市生まれ。東京大学大学院修了、社会学博士。国際社会学者。東京外国語大学学長、アジア太平洋大学交流機構（UMAP）国際事務総長、文部科学省中央教育審議会委員（大学院部会長・外国語専門部会主査）、財団法人大学セミナー・ハウス理事長などを歴任。また、オーストラリア国立大学、パリ政治学院、カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院で客員教授を務める。平成15年度「正論大賞」受賞。2004年4月より現職。現在は社団法人才能教育研究会会長などを兼務。著書に『現代中国論』、『北京烈烈』（サントリー学芸賞受賞）、『国際関係論』、『21世紀の大学』など多数。

アカデミズム、クリエイティビティで個性を身につける

学生にとって大学は、まず第一に学問をする場です。色々な経験をすることも大切ですが、まずはアカデミックな雰囲気をきちんと学んでほしい。一生のうちで大学の四年間というのは最も知的な刺激が多い時代ですから。その時代にアカデミズムとは何か、ということをきちんと自覚してください。例えばその中には、「万葉秀歌」を読む、といった幅広い教養も入ると思います。

それから、きちんと目的を持って日々を過ごしてほしい。学士課程の四年間で十分な力を付けられなかったと感じるなら、あるいは英語力がまだ足らないと感じるなら、もう少し大学にいればいいんです。学生諸君は、自分の大学生活を自分の考えでプランニングしなければなりません。

学生時代というのは、人生で最もクリエイティブな時期です。そのクリエイティブなことを、自分なりの個性を持ってやってほしい。これからの時代は競争の時代でもあるわけですから、個性化を図らないと、とても立ち行かないのではないでしょうか。

自分の大学生活を設計するということは、非常にやりがいのあることです。学生諸君には、ぜひ頑張ってもらいたいと思います。

流動化と多様化の時代、自ら理解し判断し行動する力を

一人で適切な判断に基づく行動ができ、誰とでも意思疎通できるということ。
これが、グローバル化の現代における「リーダー」の要件。

大阪大学 理事・副学長
小泉 潤二

変動の時代の「リーダー」に求められる力とは

「力」は身につけようと思って身につけることができるものばかりではありません。授業を受けて懸命に勉強すれば必ずある程度までは身につく「情報処理能力」のようなものもありますが、ある種の力は、それがどのような力であるかを表現することさえ難しく、どうすればその力が身につくのかもわかりにくいことがあります。

そのようなものとして、「どのような場所でも一人で判断し行動できて、一人で意思疎通できる力」があります。そのような独立性が何より大切であることは間違いありません。いつも一人で行動すべきであるということではなく、必要があれば一人で行動できること、必要なときには誰とでも一人で意思疎通できるということであり、これが、大学が育てようとする「リーダー」の要件の一つだと思います。

そうした「一人での」行動は適切な判断に基づいていなければなりません。しかし、すべてが変動し流動化し多様化する現代という時代に、いつも適切な判断をすることは容易ではないと思います。考え方も行動のしかたも、制度も組織も、文化も社会も、不動と思われたものも含めて実にさまざまに動きつつあります。

こうした状況を最も明確に示しているのが、「グローバル化」という言葉で表現される現象です。グローバル化は、東西の冷戦構造が終結した1990年代頃から急速に進み始めました。文字通り全世界のあらゆるところでヒトの動きや移動が激化しました。モノの流れも、資源や商品も含めて加速すると同時にボリュームが拡大しました。

カネの流れは世界経済のあらゆる部分を不可分のかたちで結び付け、国際金融危機が象徴的に示すように相当程度までは一つのシステムと思われるものを形成するようになりました。情報のネットワークは、20年前には想像できなかったほど効果的に全地球の各部分を瞬時に統合しています。大学自体が、世界的な競争や連携の中に置かれるようになりました。

グローバル化を生きぬくためのコミュニケーション能力

「グローバル化」という粗雑な表現が何を意味するにしても、これまでとは異なる状況がもたらされつつあることは確かです。私たちが否応なくこれからその中で生きていく日本の社会や文化が、こうした状況の中で確実に変化し多様となり、既成の固定した枠組みや視点からでは理解し難い事象が増えていくことになります。

そこで私から学生諸君への助言は、そのような複雑な時代を生きていくために、自ら理

大学の今がわかる情報誌

IKUEI NEWS

2009.1 vol.45

電通育英会

明日への視点

大学生が身につけるべき力

大学を訪ねて

愛媛大学

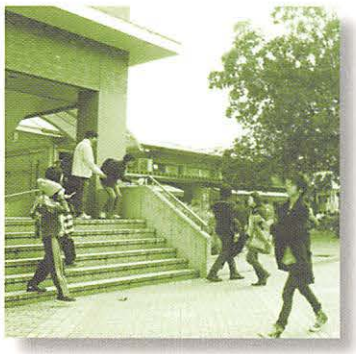
インタビュー

先輩！こんにちは

映画照明／大庭 郭基さん

連載

〈時代はくりかえ史〉加来 耕三



明日への視点

大学生が身につけるべき力

IKUEI NEWS vol.45

目　次

明日への視点
大学生が身につけるべき力

◆いま、大学生に本当に必要とされている力とは［編集部］……3
インタビュー　我究館 会長　杉村 太郎

◆学生に身につけてほしい力

寄稿1　国際的に通用する教養と語学力こそ
これからの学生が学ぶべきこと……7
国際教養大学 理事長・学長　中嶋 嶺雄

寄稿2　流動化と多様化の時代、自ら理解し判断し行動する力を……9
大阪大学 理事・副学長　小泉 潤二

◆学生が成長する学び方とは

事例1　交渉で学ぶコミュニケーションの真髄……11
大阪大学、上智大学など『大学対抗交渉コンペティション』

事例2　飛躍の鍵はまちづくりの現場にあり……13
関西学院大学『地域フィールドワーク宝塚』

事例3　産学連携で学生の可能性が開花する……15
宮城大学『産学連携による実践的な社会人基礎力育成』

事例4　自然科学実験で学ぶ「なぜ?」の思考法……17
慶應義塾大学『文系学生への実験を重視した自然科学教育』

事例5　学生の、学生による、学生のための学び方……19
岡山大学『学生参画による教育改善システム』

◆座談会「私が大学で身につけた力」……21

◆「大学生のキャリア意識調査2008」調査結果速報……26

連載・時代はくりかえす史〈最終回〉……27
「世界同時不況のときこそ、『論語』を読もう」　加来 耕三

奨学生の集い

講演1　これからの社会で求められる能力をつけるコツ……29
中央大学文学部 教授　山田 昌弘

講演2　頭のいい大学4年間の生き方……31
ヒデキ・ワダ・インスティテュート代表
精神科医・医学博士　和田 秀樹

大学を訪ねて〈第18回〉「愛媛大学」……33

先輩！こんにちは……37
映画照明　大庭 郭基さん

大学院奨学生 冬期セミナー……39

講演　21世紀のキャリアデザイン－平成的価値観の磨き方－……41
Joe's Labo 代表　城 繁幸

IKUEI INFORMATION……42